八代集抄

後撰遺賀別
羇旅哀傷

二十四

特別
イ 4
3163
104(24)

貴
14
3163
104(24)

貴庫

後拾遺和歌集第七

賀

天暦御時賀御屏風歌　源順

くもゐにはこゑもこそきこゆれはるかすみ
ちとせのうちのはるはあらんとも

入道摂政乃家一侍る屏風乃
おりしのうちのうめさくを
よめる　平兼盛

くもゐにはおりのうちのうめ
ひさしきこゑもするかな

同屏風に武義のかさ侍る
をよめる

くもとくらむかぜにて
おのとくるまとてな
をよ　ちかとむすひ
とも　ものさくを

入道摂政　東三条摂政
兼家公　正暦元年九
月出家法名如實
号法住寺院

くもりもせねとうの
花摘はのを　むり
よわ古くる　松のを
読まるを　作り
出るハ　行せるを

みちのくのはてまでもゆると
かたよしろせるゝる
一たき忍と寿をも待つ
むさし野ときその
武蔵野の雪はらく
人はのきまさりゆくを
とをしかすよ田てさ
かすゝさへちるひくの人
棚門子日松の誕し霞
とはよわ若菜の無ハ
えりまさしくとも
前大僧正明尊　元亨釈書
曰云釈明尊ハ武庫令
野奉時之子道風之孫
篁之曽孫也　康平三

むさし野をかわ乃それまゝ人はせい
ゆしるとふさもきこゝろきます
東二条院四十賀し侍りける屏風に（詮子実融院女）
子日しく男女車よりおりて小松ひく
所とよめる　　源兼隆
かすかさくまひくのぺふ松かれを
そろかさしのちよせてしらし
前大僧正明尊九十賀ゆ侍りける所に（園城寺　天台座主）
法お太政大臣竹乃杖はなりける返り
事よ読侍りける　前律師慶暹（律師十年とくく辞退）
君をいのるとしのくちをゆわれた

年十一月ニ儀同三司
藤頼通於白河別業ニ
設法会賀尊之九十之算ヲ公卿大臣多集ル其席ニ　袋草子云明尊僧正の九十賀
宇治殿乃せさせたまふ杖の哥ハ伊勢大輔「万代を竹の杖つゝ契はる
みくはらん君かさかもと　此賀ハ宇治殿大二条殿堀河大臣土御門右大臣木
よ年まり序者土御門殿賀其一句云遇八十之廻如来猶不宗九十之徴若
師亦不難量也　時人称重之由謳哥ス　杖返哥ハ前律師慶暹哥也彼
僧正弟子也君をいのるとの　此律師ハ哥仙也又至極ノ人也偏欲無上
道不思名利ヲ又観念の上人也金色乃阿字をおほけ墨字の阿字を
ほりけく観るなり墨字要しく（金云云）
君をいのる年の久く
君とハ執道云とあり
老の坂ゆよ栄行を
うて君を祈る年
久しくそうる哉と

きみのちのゆくはるとろうまつきさ
内裏乃御屏風よ命あつき人の家
よ松鶴ある所を　平兼盛
幾秋をしるしてとしふるわかみを

ましてその業に
無量の嫉き心
春秋もしらて守る
常住不変にて不
生不死のことなる
へし
一ことの松の名まし
かさゝきとは偏に
こゝろきよき無との
心やすへし
君か世をゆりそへん
松はときはのためとは
ひとつ世とうきわか
君か世は限られは
ゆりそへんとも

松とはしれとそきつく
屏風乃ゑに海乃わたりに松の一
もと侍る所を　源兼澄
一ことの松のたてしうみのとき
ゆきゝのきちしとえつれは
賀にて　読人不知
君か世をゆりそへんときはなる
松乃千とせもちとかとこそ聞き
一条院生母上東門院寛弘五年九月誕
後一条院うまれさせ給ひて七夜
に人々まかりてひとく女房盃出せと

めつらしきひかりさし
皇子乃御誕生を光
らきたとて盃を月
に比して抱かるゝは
望かりて無もめ足
たし月ハ日によりて光
光を益すに日月逢第
に抱むとぞ望と
月ハ満るとき八缺る抱
されとも抱さえ
さしそへてきりつきされ
ハ望月の無むとし
いとけなきさ衣の袖とし
般若教のゆり　おの集語
君か代ハかきりもなし

侍りけれは　紫式部　上東門院女房
めつらしきひかりさしそふさかつきを
もちなからこそちよもめくらめ
一条院第三皇子母同上寛弘六年十一月誕生
後朱雀院むまれさせ給ひて七夜
によみ侍りける　前大納言公任
いとけなきころもの袖はせはくとも
こう乃うへをハなてつくしてん
賀にて　よみ人しらす
君か代ハかきりもあらしなかつきの
かさひかるをかしぬるとし

八代九郎なる人の七歳より中納言定頼の
八雲抄に侍りし歌也
愚按新撰朗詠に後江相公徳是北辰椿葉之影再改この詩を
用ひて大椿の八千歳二度陽を見て代八限りなし と
これも八ちまのうきの
第一歳とおなじ
とよめり心得
お将敦敏 天長六年
左近廿将 清怪公卿

或人云此歌七歳より中納言定頼
よめる
[寺院第一孝敦敏也 寛保元年十月廿六日誕生]
故第一歳とぞ
お秋宮生させ給ひ内裏より
おやゆひとしはつる人を
待るふ清る 右大臣 [房公 第一歳と無伝文]
これとなちまれたるきの乃きさ
ひるふ松乃ゆきをあるとり
お将敦敏 [結生 ときまる] 七
歳よよめる 清原元輔

ひめこそ門かりの
大宮八春日大明神と
勅諚の山し宮氏く
春日氏子なれ大
原山乃種とぞ人
の子年八春日小松
なりんとて拾遺蒔
とうてと八助宗
宮のうちよのわらん
生衣を鶴の毛衣
よりけり 鶴八宮の
上より上る拾られ見
の成ものく登用せ
らるんと見しまと
ふ世とのる心の

ひめこそ門かりの
大宮八春日大明神と
勅諚の山し宮氏く
春日氏子なれ大
原山乃種とぞ人
の子年八春日小松
なりんとて拾遺蒔
とうてと八助宗
宮のうちよのわらん
生衣を鶴の毛衣
よりけり 鶴八宮の
上より上る拾られ見
の成ものく登用せ
らるんと見しまと
ふ世とのる心の

ひめこそ門かりの
大宮八春日大明神と
勅諚の山し宮氏く
春日氏子なれ大
原山乃種とぞ人
の子年八春日小松
なりんとて拾遺蒔
とうてと八助宗
宮のうちよのわらん
生衣を鶴の毛衣
よりけり 鶴八宮の
上より上る拾られ見
の成ものく登用せ
らるんと見しまと
ふ世とのる心の

[大江成衡の子 [孝]周孝]
医房朝臣 [ゆ]れ行るよう
きぬをせく はつ[ま]
よめる
赤染衛門 [大江孝周母 医房曽祖母]
宮乃うちよのわらんまてもみてふ
はるのけぶりもとりとめ
おすて七歳よよ行る
ふ世をいのるこころのうちに深き八
しるせね家乃風をもとる

行末まで付きく子孫の繁ひもうく心深くと
世世く儒業相續
の家ぞれハ絶せぬ
家の風とよりて京
しきハ風の孫枝し
いかもうせ 敦文親王の
ゐ十日の御祈禱を房
房公まうせ絶し敦文
親王の母后賢子ハ醍
師實公の女ぎ〜實
父ハ六条右大臣房
公ハ祇園社
今日也 誕生ゆゑ十日
子ぞせまる二ぞ松

敦文親王承暦元年八月薨ぜ給ひ
故第一親王乃いうまいりせくるよ
師実公敦文親王の母后乃妻父し
関白乃きゝ乃おわされいかゝ
きゝさつるゝすえて関白乃事り
ゆゝさわれい関白師道公師実公の子し
ゆる時ハ敦文親王きなもて祈るをと
てよ弁祈るる大臣房公師房公子内大臣師道公伯父
子とせまる二ぞふ乃松よかけてこう
花乃わうえもたる自さうへめ
ケこうちと冷泉院乃親王はし
てのちよりせのひとる

松を親王ぞ氏乃内
大臣と称氏ぞれ
ゆよりもくまる下
簡の内ぞれハ校と
よりも皇子の居
ゆる皇子ぞ
ゆうまいまうき
花山院出家せ絶
時ハ御封ぞ
由ぞ醍
子清仁親王と父帝
冷泉院の子ぞ
まして〜ゆゆせ絶
ゆゆハ明し
ぞれハちりもぞ

花山院御製

なかめこそいまはものきうるおてこ乃
花ぞうわ乃ものもめてなつ
白河院父帝し春宮ぞし寛徳二年正月廿六子自
後三条院ケこ乃ぞとゆゆる時今上
おさまりおうゆゆるゆゆ
ゆゆ乃ぞ乃ぞ乃ぞ乃ぞれハ後
ゆゆ乃ぞ乃ぞ乃ぞ乃ぞ
ぞれハちりもぞてよつよ
よりひをの子もまうゆ

隆年数を申すとて
つらねし心ハ明也
閑院贈太政大臣 経信公
御堂殿三男 白河院の
外祖父と號ス 郡麹在
くわちあきかくとの
心ハ明也 此隆房ハ
かくれなきもとし
親を作すへし

おもひやまこゝ歌を
初ひらきは生立乃
誠をいふ神の世
さとは男共をまつ
ちぎころの早下の趣

閑院贈太政大臣

ゑし
くわちあきかくとれひかりますくを
てらさんひかりかれさうめや

藤三位の孫也 白河院女房
むまご乃おさなきを周防内侍ん
待くのち鶴の子代子代のくらき
と云ひ出るよしいひなどこせて侍る
ゑすまぬくる

藤三位 前大和守親家女 白河院御乳母
おもひやまことはるのこれおひさきを
子母ともなづる神乃せそさ我

よろ河よゑもかすらん
手あ濱ハ宅店新云
紀伊又伊勢みそて
ここハきのふねるも
心ハ明也
人乃裳着侍る
童女乃裳着ハ男乃
元服のごとしそめて
髪あげ裳着するもま
何よし乃とし此玉もと
玉藻を裳によそへて
結ひ上てと裳のひも

きの御かみのおさなきさまを
つくこれいまひさく宮によめひ
侍れハよめる 清原元輔
よろ河よるをかすらん物えさのくみれ
ちひろ乃そのれすさごあわれり

人乃裳着侍るによめる
すみよし乃しれ玉もと結ひおけて
あきされ松乃ほをこそ見め

人のいおさなきそれぐの子とも
裳着 まとしきせかりせきをえらぬ

うちせくよかわ来
久しくせん人乃陰をえ
むもし祝てまし
いろくはなのかちも無
千年ふるき松の又常
又るもやかなり鶴（タヅ）
やむれぬることとか
てらくきこゆ
内外戚　内戚ハ父方の
外戚ハ母方の子戚ハ
親也と字彙にあり
藤原保昌　按保昌四位
大納言元方孫大和
守致忠子
かくらくの雲や北邙

きせあらし志侍るまかりてあと
ありく　源三位頼政
いろくはなのはしもせの千代ふるか
これがちらはよろづやむれぬる
大中臣輔長えらるき侍らるまに内（ナイ）　輔親孫
外戚（ゲキ）乃おかうちよく輔親乙資侍　父方　母方ヨリ
たるやとて詠る藤原保昌朝臣
かさくの（ど）おやのおやどちいろふめり
このこれちよをおもひこそやれ
三条院のみこのみやと申る時　寛和二年七月十六日立太子

帯刀（タチハキ）乃陣（チン）の哥合によみ侍る
大江嘉言（ノヨシノブ）
きみがよはちよにひとたびゐるちりの
しら雲かかるやまとなるまで
長暦二年内裏哥合によみ侍る
民部卿経信
君か代ハつきしとそおもふ神風や
みもすそ川乃すまんかぎりは

子乃子へと出子ありて
也拾遺ありけの記とも
ともちくハよりて申し我
子孫にハとらふ共（ドチ）
帯刀の陣　帯刀ハ
東宮乃侍乃名也
昔源平重代の武士
を補せし職原抄
きみかよハちよにの
塵はつもりて山となる
もやきにゐ塵の無
に一度居て山となる
ハ無量（ムリヤウ）なりとへし　奥儀抄云泰山不譲土壌故成其高
古今序ニてうきさ山も麓のちりひちより成て雲棚引（タナビク）まておひ上れるごと
君か代ハつきしとそ　神風ハ御裳濯（ミモスソ）河の枕詞　天照太神の御子の本の

いらしはらの沙門（スヤ）の代はきさいとて袋草子に云ふ或人夢に唐装束
来り女をもるを見て山寺を詠吟と各感嘆しつゝ云山寺のうちにて
帝王御寶美（ホウサヅ）堂長すべしとはめり七十七まで居たりとて建家（おこし）は檢
考に丹後の国の
やまとやうちの人
八十氏人は世に知る人
くり人をいふと近代
宮法乃里人とやう
うちの人とよむべし
きさは定家卿住院
山寺宮法殿の内家
の寺会られはせ
をつゝ行るべきに
春日山いとねの松
四月

宮法（おこし）お太政大臣乃家に世捨のち
寺会に行たるとよめる
萩原為國女（ハギハラ）
なほひやれやうぐんの乃きさぐるめ
ひとりかころりいのるいのりを
永承四年内裏寺会に松をよ
める　徳岡法師
春日山いとねの松をきさぐるめ

きさぐの代をもつて玉積
童蒙抄云大撞八子
業と春とし八子業
と秋とすと荘子の
書　愚案　逍遥遊篇
の内
冷泉院をもつて作せ
給云大炊御門南堀河
西堀川天皇御宮此院
累代後院と号こと
をもつて作せ給ふと
内裏院の再興と
岩ぐろる流乃きりと
思ひ明し世ぐりへて
も源の系とする系

子をもつてかをよろけるぐん
同寺会に法る　武部大輔資業（三位）系図有国子
きさぐの代をもつて玉ぼけきやちもも
あめかぐてんかきりあけまで
冷泉院をもつて作せ
給云大炊御門南堀
西堀川天皇御宮此院
累代後院と号こと
をもつて作せ給ふと
内裏院の再興と
岩ぐろる流乃きりと
ひさしき世ぐりへて
思ひ明し世ぐりへて
も源の系とする系
後冷泉院御製
詮子兼家公女おこた　三条院元
東三条院に春宮わたり給て池の

とつきの瓢簞也

ますとやえまさる

心ハ明し

奥儀抄云明王時者黄

河一清と云〳〵云

よませくよめる也

こゝろあるかなをもて

ことしきのこ

らく清輝なるは

わかのふのきみく

いりあれんとし

うきくさをとふくせかひける

なり　小大君　三条院女蔵人

きみとめハふこれるるもあのわかれ

みきれれこもこゝろさくなよ

関白おほいまうちきみの家乃

家にわたりめ給へる時池乃

おもしすめしむを人によみ

給へるに　藤原範永朝臣

こゝろふかいとみゆる池乃

ちよへくすまんけふ御き

かのよの所時のみな

丹波乃ゐしくりし所時

ノわつるも

千世をへんきすの

心明し祝ふをのん

しはるも千世への

人とまへしくし

大嘗会御屏風

御代乃始り、大嘗会

とわいせかすふ風俗哥

屏風哥とて何かお

乃集れ詮二番後冷

泉院乃時の哥ハ資

業家経とぞ書き

よろ川よ千世を呼ね

後拾遺丹後ゟく給へる時の

ゐの所時の祭乃使まて萩の

て給へるとて　良暹法師

千世をへんきみのかさせる萩乃ある

松よかねるこゝちこそすれ

後冷泉院御時大嘗会御屏風

近江国亀岳有松樹多生

式部大輔資業

よろ川よに千世をかさねてゆる

かめれあある松乃みとかわり

後八百世にいたるまで

同御屏風の大嵯山をよめる

うこきなきおきつ山をそなれ
大嵯山近見嵯峨
物を納る物なれと
古今続の山とそ
きはとゝ林院也

おさまれるよりそ〻くるき

陽明門院をはくにおりこせる
たるをきて　江侍従大江匡衡妻
赤染衛門

陽明門院三条院皇女
後朱雀院后後三条院
御母号禎子内親王

ひときの乃中のよう
第乃中とハ后乃事を八宮御乃
ひとを中ふ中ふとゝ
こいをまつ

ひときの乃中のよう
ときくこそうきもつかりけき
ときくこハ后乃事を八宮御乃
ひとを中ふ中ふとゝ
江侍従

後拾遺和歌集第八

別

餞別

別

祭主補親ゆきのすけ
ちとせるよ野乃をしれ
れるのゝんとすとつひくは
うつてるる　高辻法師

和泉式部
君去春山誰共遊
鳥啼花落水空流
流ミ三林詩

和泉式部のこゝ乃
君乃去春山誰
ハ誰とたゝよ
ゝやさんとゝ王永
をとる劉廣が詩

和泉式部のこゝ乃
君乃去春山誰共遊
鳥啼花落水空流
流ミ三林詩

祭主補親

おもひやるこゝ乃
ゝ乃和泉式部

心ハ明らし
人乃ことゝみなから
思ひへなることなく
人乃ことゝゆきは
都りわたれし
はねるゝハおつて
都出て思へ
うるとのや人乃
告やせられのこ
そのかきに向きて
あかねハ都へ迄
みやこいつるけさうり
のさのれどずまわ
ふゆそ人を何児ん

秋乃うちちりハかつてさしめや
ぬるあく下まゝる人乃こゝまゝ
見たるは侍りさわられハ家のとから
にかきつける　源道済

はねあるハおつてかつてもきけりを
こやこいげらひとみはける

あつまへまかりて京をこつる月
よみ侍る　増基法師

みやこいつるけさハかよまよつめも
あひまくひとをわすましかハ

まゝ迄為憲まかりくだりけるにあ
るあちおきはかりしかるまで待る
藤原道信朝臣

わかれくる乃ゆくせのまの春こゝろよ
花乃子やこをおもひをこせよ

ちくまのことゝ越後ふまかはるゝまゝ
逢坂乃下よる源為善（ノタメヨシ）朝臣のもと
につかはしける　藤原惟規（ノブノリ）越後守為時子

けさうのせきうちこゆるかうしく
けさハみやこれひとつこひしき

て別る（ハ）せめて
あくさめむ物をと
わかれくる乃とゝせの
受領ハ一任四年と
てこまよて東務を
をさゝめまし〳〵ちせ
まゆくかゝる別のま
こゝろも花の子やこ
を思ひおこせと
何ふさうのせきうら
父のもとへと出立
ける様かゝる逢坂
をこゆるやうるやう
み都乃あの迄き
とき

よしはねは岸に別の
かく鹿狩する営て
あるときわ折るる夭
切りはれ於て後割り
桜して三ちかり
すれさらくはかり
ぬまはりて世たまき近
ゆくすゑとも
三月の桜されたり
まとさもにとは册
浪凡波の紙られ
とてそれを告すと

ぬすみへすみかくる人はかりきぬ
鹿つなぎとて　藤原長能
よしはねはおもふわか身乃桜かくし
こゝろしてあらしもふけせきもりや
三月ちかくちるころ乃　藤原惟憲
ふかくくちけるに鹿のつなとて
藤乃枝はくわしくてむすひつけ
さ待くる　選子内親王
ゆくすゑもよもちかねるふかき千ちよを
いのちかけるいちのち千乃丈郎

也形けるる藤波
乃縁かゝや
いのちはちよかけ
生の松は花おの名
平のかは縁家
それ八せるとふ覚と
思ひく待り世を
みてせんすを思ひ
やるとの也
これ世もわかよも
あさか命とうれね
世乃縁をまもりと
まもるてくらひ
人にもや申し
との也

かへし　藤原為正
いのちはちよをかけける藤波は
生乃かはらぬおもひやるれ
人乃手をさとるよのわかれけ
かへり　藤原道信朝臣
これが世もわかよもおもふよのかたに
まれなるいかはんとすらん
入道摂政わかう侍る時大納言経（兼家公）
乃母（倫寧女）にかよひ侍るよみちのくに
へまかりさるとてへ人をおもはれく（兼家公なり）

きみをのこしのむ様
むすめをもちて世
をきそ者をのこし乳
様の心よハ行末
幾久しくと祈る
たくさんふるの心拙
陸奥のをきさを
我をのこしのむと
我をのこし祈れハ
我もかゝしをれハ
行末久しきさを
ひなのくとし拙陸奥
の未法を又ハ
法園 堪園 阿闍梨
伊与国人

て女の祝よ今ハ行わかる 潰海竹惟岳子
萩原倫寧朝臣 伊勢国

きみをのこしのむ様なるこゝろよ
ゆくすゑをたくなりかるゝ郎
あり

入道摂政

我をのこしのむといふ行末乃
松乃ちよをもきみをうゝんめ
はくしよくわくゝ行るにのか
らんとゝくゝ家あるゝある人のを
ふ書をるる 法園法師

山乃ちよる月新しハ
山乃ちよる月ハ未ひ出よ
邪れ乃ちれハ祝を
ゆ乃ハ出ゆとし 花
ハ乃ちハ咲ゆ法
の方乃ハ祝ゆ長と

ひくゝ乃ちを世を
末の松ハ陸奥い
きれ書ハ法
ゆ乃ちを

山乃ちよる月新しハ 山乃ちよる月新しハ出よ
祝乃ちれハ祝乃ちわきもしまゆ
源新法名乃ちの乃ちを
そ又肥後乃ちを御て下を行る
をゝ乃ちを乃ちを法ゆ
さゝの世乃ちる 相模

ひくゝ乃ちを世を乃ちを小君や面ん
すゑ乃松乃ちハいき乃ちハ
東言法ハ出ゆ乃ちを
よんゝ乃ちを乃ちを乃ちを

いとうきわう人倉三
心ハ酒ゆゑ
うれ倉うゑ
てゆゑて
しきと

いとうきわいのちきへゆく人乃
かてんまくうゑ〳〵ゆゑぬる
対する
の宗門ゆゑ
はゆゑ

いのちハとゆゑ
歌沒語江芦乃宿
皆はの宗門名ゆ
そうする対する
宗の様ゆゑハ文
ゆゑんしきとの心
きゆくゆゑの別と
白河関奥列ゆ
うひゆゑ

いのちハ江乃ゆ乃うそう
ゆゑ
大江素言
はうゆゑ
檜則光みちのくゆゑ下里佐ゆ
はひきゆゑ中納言家
かゆゑ乃別とゆゑへと白河乃

うさのはうひ宗
八幡宮一勅使ゆ
ゆゑ伊勢物尾番
ゆゑゆゑ知舞
すゆゑはゆ伊下
うゆゑく伝四と
ゆゑゆゑ

われちハ〳〵ゆゑ
別ゆゑく林を
立ゆゑち鶯
ゆゑハ宗ゆゑ
きゆゑん

せきとうめぬそゆゑ
よみちゆ乃和名十二月乃ゆゑ
うさ乃はひよゆゑ
ゆゆゑ
鶯ゆゑ
よみ伝ゆゑ

檜則長

われちハ名ゆゑかゆゑ
ゆゑれ宗ゆゑきんこすん
はゆゑへ下里ゆゑ人ゆゑれゆゑ
ゆゑく人宗ゆゑ

月のかくれ給ひ乃
わかれしきまゝ
別れをおしむんですよ
との心をよめる也
ゆくすゑも知らす
行人ハ浮世乃海
法乃船をこえて
おつるも数多あり
細にすれてまよく
みすひる人それの命
吉れハ程なきを道
わかるべき中を
うき世を道別
くるしやそれにて
一別ゆくべき中を

ともすれは梅をくやしくみけ
ゆきかにをわすれしひとつて
よみ侍る　慶花法師
ゆくすゑはわれまゆきかたさへうん
わかれ川つきいのちあるねも
ほとけのおわてのちら良暹法
のまにはうしるる
よみ人しらす
わかるべき中とさるくもつれしく
あひりみるかなふハくやしき

おもひ立しくおもひ
さまの梅もさかりの
おもひく別んその盛
しきなし
ありけるいのちを
名残ハきとハ問わ
ある心をさけ津まの
いさをいふん秘通
我餘命もなく又
もまのりんと結ぶき
物を也
春ハ花秋ハ月かと
花月の形見もれ
住んまして棲て別ん
こハあえまし也

よし　良暹法師
ありけるいのちをかゝつまつまの
みるやくるとむかしくよのを
能因法師いよの雲まかのかたるよ
別れ行く　藤原家經朝臣
春ハ花秋を月またちまり津く
なのをわかれておもんさわなわ
能因法師いよの雲かわのかわて
みなかたなるとんこその錦く
何あんまるのかわんとてい給わ

おもしろくみめて
いとおもしろさやうにみゆめ
ていつも春ごとに花乃
盛ハいつもまされの也
されどもよしとも云ぬ
此歌ハよくこれを云ひ
て花盛にまされね
やまたる詠なるべし
此ハゆきまし伊勢物語
源兼長ふかれしが
ず花の盛ハとく
花の盛にいとよ也
思ひ出よちらハ還よ
君がうちてめでたハ
山の端にかくれぬ

花によめる　源兼長

おしなべて色めくはなはまさりけり
花乃さかりハいつもまされり

かゝる人乃心の花を待ち
たるよ　源頼瀬

思ひ出よちらハちるらんあかねさへ
心乃うちハやまもつらし
のこへすかてわかるゝ人
まつくきて名よ千待たれハ
となるへき千ちにハあらて中々よ

おもひ出よ継も君を
思ひきれと命也
となるべきなれバ
それいさまわねど
ならぬ風うまき
あれて深別きる
にされハ中々にほ人
ゆひそおもんと
すり山乃松のうら風
松山松のうら皆讃岐
阿野郡也　三貝ハ彼
浦乃名物にて也
ゆり此ハ此方まで
人々を拾て也
さぬきより出る物

ゆくさくうるふハあるへかりける

さぬきへまかりける人のもとにつかはし
ける　中納言さだより

すり山乃松のうら風ふきよせハ
ひろひてしのへこひわすれかひ

題し　源光成　中務丞 大位 成佐ガ猶子

ころねちるあへねらんよ
まつきかけうる松ぞうれしき

右君　萬葉
かゝらしハかよまもかたるゝ人
せんかひるまもかよしけとわて

やかてとこそねられとも
まちかつらんするそひ
さらせてもしらさま
袖へとぬるゝさせそと
かくしつゝおもはくの
いふともいくも八幡宮
童蒙抄ニ朗詠ニ大江以言
詩序云楊岐路滑我
之送人多年李門
波高人之送我何日
この序の心とおもひますさ
人の受領してゆくは
それとも我はゆかぬ
受領せんとのぞみも
なき心をいへるなり

源兼澄 陸奥

かつはおもへ乃人におくれさきだつね
わかれをもいとへともいかにとも
大江公資朝臣遠江守にて下り侍るに
侍るに出立の九月比なるの餞
すとてかはらけとらするとよみ
侍る

源為善朝臣

これやゆくとさもとまらず別ぬる
なかりやすまひ侍らんとすらん
侍るさまはぬ中へゆくると女のもと

それゆくことを
上るは心得ぬ也
あづまぢの遠江は
まだ見ぬ国なるを
八遠江もおなじき
我はまだ見ぬ事
知ぬさきをおもひや
あふさかの関路にゆ
くは心ありやと
ひとゝ女のなき心
わからすれとよみを
射かける
ゆく人もとまるもいかに
ひとたび離別のうへ
又ふたゝびのわかれを

ますひはかりなるをわかす
にちとまけも関にゆるさめ
何まはさまさ心絶なすれとおいて
侍れはなげく 祭主輔親
あふさかの関路にゆくも越ぬる
ひとりこそのかよはさうめや
橘道貞式部(和泉式)をかはしけるに
みちの侍りけれは式部がもとに
はべりける 赤染衛門
ゆくひともとまるもいかにおもふらん

道貞上人の武蔵
いふらせしとき

わかれくのちの乃ふれをも
ゆつりひとる事ふうちとも
をきて西へゆんいくといひ侍れい

中原政成

いつちとも志ねぬるれの様なれと
乃ふひとれと
人乃ひ来も我ゆ
れを用乃さきる
ちいつるふくみを

いつちとも志ねぬるれの様なれと
伊ふくあて乃さきる立ん
安よむつもしく陶くれとも
きをまちわれれ安のとよ
月宗ねるふくこと侍るる
きの乃心ち安ゆ葉といひる

いつちとも宗ねるる
心地

ゆりていふれを
をくふくあ命る
人行ゆ我ゆ定結
結きもきをもすを
ゆりて雅を宗人と
きほ乃前よりの
金澤のふみる
き心をゆちきよ
歌子乃中ふくい
一人おれふ平し
人とわれゆ侍
ほふ乃人と別
をゆふ

年ふきりる安を浦歌

いつちとも宗ねるふ
ふるかよりねりをゆふを
ほふ

菊屋節信

ゆふふれをんふふん
ゆひふきひとゆほやを
つふよりてのわゆ侍る
よ人とわれゆみ侍るよ
ゆる

連歌法師　長慶法師

大江正雲　大学大允　大隅守伸宣子

寂昭法師入唐せんとてはらへ
へるのわかれてとしのくれ七月七日
毎のわかれるまはらへる

後拾遺和歌集第九

羇旅

石山寺に参詣して所々
所々にて建立の願意
観音金剛蔵王
執金剛神　元亨天書
竜井　逢坂の関
の清水　石山寺
の三井寺　三尺十一面
法道仙人造　元亨天書

源河太政大臣　兼通公　師輔息

石山寺にまうでて侍りける時
みやこをいでて侍りける

逢坂の関の清水にうつる月
のかげをみてよめる

みやこをいでしかたをこひ
ながめてよめる

ながらへばまたこのごろや
しのばれむ
うきよにものをおもはざりし
ときは

十月ばかりにつせにまうで
て侍りけるに
あかつきの雪
を見て侍りける

お大納言公任

[illegible]

中納言定家

[illegible]

[illegible]

[illegible]

[illegible]

すぎてよおがゆるるの八月十六
夜にの芦原の面
白さまるてうきを
縄はさあしひろす
ともさし舟のさ白
何乃やれこやの
芦之屋長陽はの
風し我ゆあわさ面
乃ろうもうきよ
みるうしし

増基法師

ケやこの千四万五千まて赤潟を
我心はあつまりて
こあすの名所あ

[illegible]

はの出へまるるるまく

能因法師

何乃やれこやのわくりよ貝吉ね
うちゆくらんこまの小まのせく
何つまへまのわくるみちみく

増基法師

[illegible]

[illegible]

[illegible]

乃姫

七月朔日はをりはたりるよ
夕涼子は関山をこゆとて志ハ
車をとめてやすみ給へよ
みゆるる　赤染衛門

こえてこそ　はるもこゆ
ハ消し寺　清原
ふるさとの　ふるさとの人
とはの名をとも　せきもりゆ　こえてこそ　はるもこゆ
ぬ

ふるさとの　ふるさとの
心ハ消ちる　みやこ
様の者ゆく　ふるさと
様者を　はるの
はるかすみ　ふるさとの
はるの　はるの
はるの　はるの
はるの　はる

あつまちよりてとうまる
字留る義陸奥賓
こふ名なくくり
ふを買とうてよ
めり
ちりをにの雪
公資を白ちくく
下てのち長人元年
十月七日卒作之
ひつまちのそまる
涙名残を江に芭蕉
と書ちり下るれを
昔恋ひきけりとも

ひつまれてこまりかるふうまと
いふ所にて　源重之

あつまちよこてをうまと
ゆきふひとのひれいなりけり

ちりかるてまを江ぬ
底経の行ふ
逢てく桜下野ちるて下と伝る
そまるりそのちとめくよ
を江宮公資ふく
みけるる　大江底経朝臣

ひつはまちりまるの橋をきえられて
むりこひしきりちりちりわ

ちりすれわちりそよと伝る
能因法師

ちりすれわちりそよと伝る
なりふ人あるとあけまとある里を
ちりすりこうこひしりられ
みちのくあまりわちりるま白
河乃関ちくよみ伝る
みやこいかすそとにふりと
ちりせうわく ちり川乃せき
出羽乃雪よりわてきさりと
いとろるそよめる

わちりハ橋の孤伝ふ
ちりすれ人あるとられ
せさすのとりはハ河
うてく出家られハ
人の古ちまあ
らすく
みやこいかすそと
まきすそと徒く袋草
子云能因実ハ不下高せ
奥列ニ為詠此所ニ寓ニ
蟄居して下向奥列ニ
之由を風聞スニ二度
下向の由あるれ一家ニ
八賓元書八十嶋記ヲ

世乃中ハかくてもくらわきさうの
ものかなれとまやとわりやとるしらく
ほてゝくらわくるをさはまれ滝よ
てとをはくる　大中臣能宣朝臣
世乃中ハかくてもくらわきさうの
ものかなれとまやとわりやとるしらく
ほてゝくらわくるをさはまれ滝よ
てとをはくる　大中臣能宣朝臣
すまれとうとらふすきはけとこうろ
かてるあをりやこをはてやし
紙屋へまわりやとるふ当やく
とんてよめる　大武言忠　拾遺抄
風ふけハをとのうちわうちひき
藻汐草と燒て古今集よ
やく燒て古今集よ

すまれとうとらふすきはけとこうろ
燒風ふけハをとのうちわうちひき
藻汐草と燒て古今集よ
やく燒て古今集よ

出家乃ひとをたのひよとわれ
世をよりまてあるとしの月と
山法師　花山院御製　寛和上皇
世を上人なるとし元
亨元年十二月空傳云
長保四年寛和上皇
山幸庁勅延源園梨
圖空像并記行業
月かけハくもりのう
心ハ明るし
おもつるる邪のう
月をうとりつて
邪をとりまるる

出家乃ひとをたのひよとわれ
世をよりまてあるとしの月と
山法師　花山院御製　寛和上皇
月かけハくもりのうをとけ
あるをとけやこのみこひきやあ
とわれ明るとはあるよとわゆあ
よまわて月乃ゆのやとるよ中
宮乃基盤あるとしてあるわ伝
ある　中納言資綱　基の男
かはるる邪乃うをやいるん

[illegible]

[illegible]

[illegible]

[illegible]

[illegible]

長徳二年冬月藤原[illegible]

[illegible]

[illegible]

これやこの月乃るとい
信濃の姨捨山月の
ゆゑなれい月乃ゆ
みとゆるゆゆや

月のゆゑなれい 梅宮仲姉君 太皇大后宮 藤公経通子

これやこの月乃るとひよりしやる
とゝすゝやまれゆゝとゆゝん

春乃こゝろゆるゝよりのゝゆゝ佐ゝる
乃ゆゝよめる 源道濱

ゆゝわゝせいゝやこゝちゝゆゝゆゝん
すきぬる山ゝかゝゆゝてゝ川

おゝゝゝちゝゝゝ

さゝゝゝけゝゝ家乃ゝゝゝゝゝゝん
みきゝ乃波ゝこゝゝゝゝゝゝゝゝ

あゝゝ川のゝゝゝゝ
のゝゝ乃ゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝ
乃ゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝ
ゝゝ乃別ゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝ
ゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝ
寂蓮入唐ゝ舟出乃
別ゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝ
原心 ゝ集ゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝ
坐主。西明寺。大僧都
元亨釋書九ニ 僧名宣基 桑茂大江 秋之子
羅刹女法華経乃
讀誦をこゝして天上
ゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝ
ゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝ
ゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝ
ゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝ

お大納言公任

あゝゝ川のゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝ

一条院乃院時宣旨ニ
既月抄云定子皇后ハ
一条院乃后也中関白
道隆乃娘也しかるを
彼后位をのけ奉り
まうけたる此
ようもすくちまの
あさうの御製を三
あそばすかなくて御製
三まきりんの元因の三
ひまきりまきと恨月
抄云とかくて法皇の
細小詞ひ付き奉あり

後拾遺和歌集第十

哀傷

一条院乃院時宣旨宮ハ(クウヨウグウ)れ給く
のち帳(チヨウ)の内ひろひ出す
ひ付き奉てる文を人付奉れと
内へ持入せ給へと申ハ分
に寄こ川去付き奉わたる中よ
恨月抄云ちまりまと三れとハ
よもすがらこひんなるこのいろゆのさ
こひんなるひとも奉別ハ今ハとて

原兼長 結婚する女子お結婚する五位

冥途（メイド）

葬送（ソウソウ）

三条院乃皇太后宮かれ侍てさう
帝の位無を皇太后宮
ゝ 三条院の位ゆえ
贈位官起子兼家公女
天元元年正月廿八日庚
申の夜うせのゝ半ばに
法ゝ番
あゝ ゝ ゝ 宮ゝれゝ
宮院ハうせのゝ
心ハ明し
資融院法皇うせゝて
寛和元年八月廿九日
家廿七案法名人金剛法
寛弘八年六月廿二日崩
年七歳云彼尺号乃

いかゝ和をひとゝ乃ゝゝん
三条院（六十七）乃皇太后宮かれ侍てさう
ゝ乃花月あゝ侍ゝゝよ侍る
令母（ミヤウフ）乳母（めのと）兼澄女
あゝゝ ゝ ゝ宮ゝれゝん
のゝゝ
資融院（卒歳）法皇うせゝて
葬送と侍ゝゝよ一とせ
せさせゝひゝゝあゝゝ子日
みゝ侍ゝゝ

左大将朝光（アサミツ）忠義公子

法入滅の時に大師入滅の時に随入滅と播磨
波提が山にひとくれの雲
て流れ来る人皆ちりぬる人
いとかなしかりけるもの
ちりぬるの中のけも
紫宸殿に紫野をうて
ちりぬるこそは
ひとくれの桜の雲
思ふ心をとうて
なれしの心をこめて
をれとはなれの中の
ぬれも同じ
此二首業平の西海にて

ちりぬるの中のひとくれもやはり
まりかすみ
をれとはねのちゆきはうきをを
ちりぬるうをぬしひとくれ
長保二年十二月に皇后宮定子
ちりぬる 藤原の道長の御
はせる 一条院御製
の中のくれの心ひとくれはのよくとも
我ゆきとはちりぬるやうとん

大納言行成

の中のくれの心ひとくれ
思ふ心はかりはかりはかり
とは知らんとこの雪
をとうての中の
ちりぬる雪かな

奥義抄云ちりぬるとは
仏化孫つきて入滅して
とこれよりて法
つの林とはけ林を
云也 涅槃経序
品云爾時拘尸那城
娑羅樹林変白鶴
如白鶴 この
栄花物語に鶴林云
ちりぬる雪
長谷の入る云はは

入道前太政大臣 御堂殿 万寿四年十二月四日薨 六十二歳
さうのはつ
よ人こまりゆくよ雪の降くれ
法橋慈命 栄花物語に慈命内供云
よしはらの
業平の
ちりぬる雪かな
ちりぬるとは
のちこうすれ
入道一品宮 後白河女 備子内親王 流安四年 宵二月出家 光
仏よりの
はけつくる
ちりぬる
ちりぬる
ちりぬる
ちりぬる

[illegible]

二月十六日乃月のやうにうんのうの葬送

[illegible]

[illegible]

[illegible]

玉とゝ流るゝ涙と
もに袖の内の用
なるか袖のこゝ
ちとこゝろもとゝ

中宮九月か　後一条院
乃中宮國子御堂関白
の御女　長元九年九月
廿日かうせ給　後朱雀院
拾遺　此三首
弘徽殿中宮　後朱雀院の
中宮　嫄子　敦康親王女
源関白教通　養女長暦
三年八月廿八日薨　後冷
紀選　拾遺　系図第三
巻　但　後冷拾遺　廿四

袖をうちとゝ人乃とゝ
ん

後一条院御時中宮九月ようせ
國子
ん　後朱雀院御時　人弘徽殿
中宮八月よりわたれ給ひ
嫄子
彼
ゝ
ゝ
ゝ

右兵衛督殿 後実子 とれて 殺さ 侍

[illegible]

[illegible]

右大臣の方 権中納言隆俊女 従二位藤原隆子

いかにかさひしくるんこのころの

[illegible]

親なくなりて山寺に侍る人のもと

[illegible]

[illegible]

[illegible]

[illegible]

出羽 おわりの平季信女

[illegible]

[illegible]

[illegible]

[illegible]

清原元俊

元俊

よもの乃ちとせ

よもの乃ちとせ

こうてよりの

しるる

式部命婦 統おなじ信子女 ほ冷泉院女房

[illegible]

七十代 堀川院位よりはじめてのぢ
月の内侍[illegible]ぞ[illegible]て六月一日
又[illegible]の内侍[illegible]
七十代後冷泉院
帝の内侍[illegible]
[illegible]
六月一日[illegible]
[illegible]
[illegible]

二条前太政大臣
教通公の
乃[illegible]
平親[illegible]乃女[illegible]
[illegible]
五月[illegible]

[illegible]
[illegible]
[illegible]

山寺の山法乃法師
てらくさこの山寺
学むの法師四人そてぬる
のきよりの雷左衛
門の宣旨くくわくし七
日とりよりせまり嚴
三年青八月也相如人
よりハ衣と思ひ出て今
て山法師とのの歌書
限りの文すしひあり
叩はれハ宮河う歌
て重田殿を恋ふる心
ちれうて孫小四月
たのるようせかりと
ぶりてみも逆まの事

山寺ハ軍田左衛門尉
家より文乃相如
ぶりて山法師
ちれぬをもちけるさもりとと
てりもあくぶまわよれれいく
よりハ衣と思ひ出て今
ちれうて孫小四月
たのるようせかりと
ぶりてみも逆まの事

関白を兼ねる

相如

荻原實方朝臣

ちるかりて山法師

よりよりの書の歌
法師ちりて山法師
ちるかりて山法師
ちるかりて山法師
ちるか

[illegible]

一条院うせたまひて後は、[illegible]（六十八代）一条院おさまりかねたまひて

寛弘八年六月廿二日崩

御年卅三歳

[illegible]

[illegible]

[illegible]

[illegible]

[illegible]

[illegible]

[illegible]

兼綱朝臣 或云兼綱乃尚道成の[illegible]

[illegible]

[illegible]

[illegible]

[illegible]

[illegible]

[illegible]

[illegible]

[illegible]

[illegible] 枇杷左大臣乃うませる
ひめ君一品宮陽明門院をし
わかなかりつみ
心明し 堪きすつき
はかまそもやまと

[illegible]
心明し 堪きすつき
て此はと

[illegible]
きのふをきてとやもさわらわ
ちくらかつぬき結くる自よめる
重義

平棟仲 ムネナカ 貞房卿 安義を重義子

[illegible]
ひとのかるようめすこ深乃
ころもうさへもわれぬるる
平教成 ノリナリ 元を重義子

うすくこく 衣の色
心明し

おすしまるかつる袖の露
山ぬきはくるよめる

菊原宣旨 [illegible]

うきさまつかつ
新しき菊
衣をれいうきさつ
すりふきあものを
ふりさとつ
の心 黒き陳服せ
心を問はつ

一条院 拾遺 一条南大宮東二町 業平朝臣九条はの住所

うきさまつかつ
たくはかつる
十月はかつる
一条院をすくこく車を引入
天結れはひさき屋の結る
とんそよめる 赤染衛門

きげさ[illegible]院
[illegible]
乃[illegible]
[illegible]
彼院乃[illegible]
[illegible]の彼女[illegible]
菩提樹院 栄[illegible]
云二条院章子 故院は[illegible]
乃[illegible]
[illegible]て菩提院とて[illegible]
[illegible]
[illegible]

むりふうりとの色

叶よとく結ぶとはてよゆてか
乃信宗弘居乃ゝとゝはつゝる

伊勢大輔

ひやるあれあれあれ
ひやるあれあれあれ
おりてうきねいさうあれゝん

秋ぶすわゝる人をおりひ出く
よめる　源重之

ゝとゝとゝむゝいとをくゝゆけと
うゝゝ秋ハゝをまゝりゝゝ
ちゝゝゝちきゝ物をわゝ川

義孝卒時の死ぬる人
は夢ゝ見ゝし寿辺深の
河のさゝゝく明ゝ
ちゝハゝゝハされとふ
とゝ絵と絵されと絵
せゝゝと河ゝ川を
ゆんゝよゝ
ゝゝハと
ちれとハちゝ
こゝゝハ時ゝと
ゝれとわゝ
ゝんゝゝ寿ゝ
ゝれ種ゝの死ゝゝ
ゝゝれゝ多ゝれ
ゝる多とゝよ高ゝ

かゝるゝゝハわゝゝゝやゝ
寿ゝゝれゝ病ひ結ゝゝ
あゝゝわゝゝゝゝゝて絵ゝ
ゝてんとゝとゝの女ゝゝひ結て
結ゝゝ身ゝわゝのゝ忘れゝ
ゝゝ忘れハゝ世乃美ゝ
ゝて結ゝゝ
ゝれとハちゝ乃ゝゝちわゝふ
ゝゝゝゝゝゝゝゝ和ゝゝん
ゝゝれゝゝゝ多ゝれ
ゝゝ高ゝ

懐子死出花宴後書

独わすれのみちとし歌
なまふ三ぶ山の法
菩提蓮華宮裡月分
遊極楽界風山句
詩とうたなり
空弘法師 ひしり光
乃国型ちうし
母のくいなわ立る
空弘の義者よりし
句

きくあれ 家の神も
心あきくる

いうとの美 義者
の妹 女作のみよ恒徳公

やうよ空弘法師乃美よ学ける
まく生を山ことるれよ口と
心ちすまんれる母のくいわ
遊ると心ちけ山くいるみといひ
れいれ空弘の立義者のとうて
とめてよめると
あんひはくる

きくあれ 家乃神もかてぬよ
わるわ 秋ちわよるる
山寺多わてのちはる義者
いうとの美よお将ちうる

乃小方道信の母
あるをみる書ことま
いそあひくとそみ
れとふいそれも
あるすいえあす美
うていひうとも

とそ乃て伝る
あるすとみるれとそいてそと
ゆめちあくいひるわ
ある人乃ていく山寺山女を
きくあ多わよるるおとと乃
むすめ乃美りか乃女りとせ
よとくよみ伝る

むすめ乃美のとと
美よとくる必の寺
ときくるる
うくくとまそりハ
うきくんのちるこか

むとめか乃女のとよやるとて
よみ伝る　よひとちくと
くくをまそりいけつうきくんの

こゝに又出世の御
ものもとにいでゝ
むとりみてるを
いそんでなきうを
うてよめり
ちきよりうちをを
我こう冥途のりゆ
きく真のり出てる
とゝうあれきとと

こまくる
やうとかの
ものとゝうゝ
出ゝ
ゝかてるまゝ
ゝかてるとゝ
ちきうとゝ
わきとうゝ
ゝうあれ